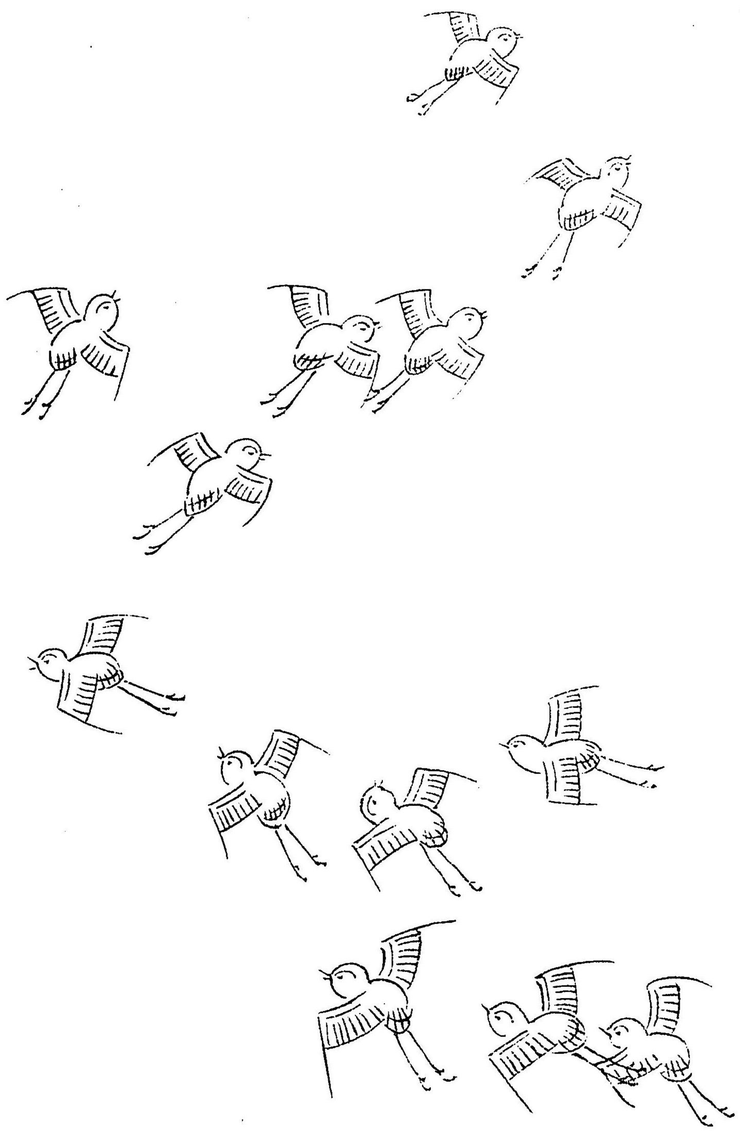
觀世流改訂謠本

内十四

246
15
198

春日龍神
紅梅
源氏供養
花筐
富士太鼓



謹啓益々御多祥之段大慶至極に奉存候陳者本日觀世流改訂本再版第一回發行分漸く出來仕候實は去月廿日に此分を御配布可致筈に有之候處何分引受印刷所の多忙の爲四月卅日に至り漸く刷了致候有樣にて配本相後れ候事申譯も無之候第二回發行分十三册は既に製版中に有之第一回の遷延に鑑み印刷所と確く協議致し印刷を取急がせ居り候が第一回遷延の影響を受け最初の豫定期日五月二十日に發行致候事は少しく困難に有之候間改めて六月五日發行の事と致候不悪御了承願上候又第三回發行分は六月卅日に發行配本の豫定に致居候が此分の中「内一、二、三、四、外一、二、別一、二、」の八册四百枚は初版の書體面白からず候により新に書き改むるものに御座候故筆者執筆の都合により或は十日間位の遲延を來すことも可有之と存候故恐縮ながら其御含に願上候上述の如く發行期日を變更致候に付乙種會員諸君の會費拂込期日を左の如く改定致候

第二回拂込　金四圓六十錢
五月廿五日迄に拂込の事

第三回(最終)拂込　金四圓六拾錢
六月廿五日迄に拂込の事

丙種會員諸君の分は變更致さず候

◉改訂本再版追加注文

今回再版發行致候改訂本は會員數豫定に超え候により少しく多數に增刷せしめ候爲目下二百部程の殘餘を生じ居候由りて之を賣品となし追加注文の方法を設けて入會期を逸せられたる諸君の高需に應ずること丶致候追加注文の特價幷に配本方法左の如く候

○**特價**　二百部限り金拾六圓、内譯第一回發行分に對して金六圓、第二回發行分に對して金五圓、第三回發行分に對して金五圓。

○**拂込幷に配本**　毎月發行の通知後一週日の間に拂込を乞ひ着金次第配本するものと致候。第一回分は既發行に付御送金次第配本可致候

◉一番綴稽古本發行

再版印刷の序を以て試に一番綴稽古用改訂本三百部を印刷せしめ候御使用の便利多き樣なれば引續き增刷せしむべく候

定價　一册　金拾錢

郵税は十二三册(二百目迄)にて内地八錢臺灣清韓參拾錢に有之候

一番綴本今回發行の分

賀茂　俊寛　松風　西行櫻　浮船　吳服
八島　鵺　鵜小町　葛城　當麻　鞍馬天狗　海士
定家　咸陽宮　東岸居士　龍田　夜討曾我　夕顔
角田川　雲林院　春日龍神　船橋　源氏供養　花筐

分の中「内一、二、三、四、外一、二、別一、二、」の八冊四百枚は初版の書體面白からず候により新に書き改むるものに御座候故筆者執筆の都合により或は十日間位の遲延を來すことも可有之と存候故恐縮ながら其御含に願上候上述の如く發行期日を變更致候に付乙種會員諸君の會費拂込期日を左の如く改定致候

第二回拂込　金四圓六十錢
五月廿五日迄に拂込の事

第三回(最終)拂込　金四圓六拾錢
六月廿五日迄に拂込の事

丙種會員諸君の分は變更致さず候

◉改訂本再版追加注文

今回再版發行致候改訂本は會員數豫定に超え候により少しく多數に增刷せしめ候爲目下二百部程の殘餘を生じ居候由りて之を賣品となし追加注文の方法を設けて入會期を逸せられたる諸君の高需に應ずることゝ致候追加注文の特價幷に配本方法左の如く候

○特價　二百部限り金拾六圓、內譯第一回發行分に對して金六圓、第二回發行分に對して金五圓、第三回發行分に對して金五圓。

○拂込幷に配本　毎月發行の通知後一週日の間に拂込を乞ひ着金次第配本するものと致候。第一回分は既發行に付御送金次第配本可致候

◉一番綴稽古本發行

再版印刷の序を以て試に一番綴稽古用改訂本三百部を印刷せしめ候御使用の便利多き樣なれば引續き增刷せしむべく候

定價　一册　金拾錢

郵稅は十二三冊(二百目迄)にて內地八錢臺灣清韓參拾錢に有之候

一番綴本今回發行の分

賀茂　俊寛　松風　西行櫻　浮船　吳服
八島　鸚鵡小町　葛城　當麻　鞍馬天狗　海士
定家　咸陽宮　東岸居士　龍田　夜討曾我　夕顏
角田川　雲林院　春日龍神　船橋　源氏供養　花筐
富士太皷　皇帝　通盛　檜垣　櫻川　山姥
氷室　善界　芭蕉　百萬　船辨慶　右近
女郎花　關寺小町　自然居士　大會　三輪　安宅
東北　蟬丸　猩々　白髭　盛久　佛原
善知鳥　小塩　邯鄲　殺生石　野宮　錦木
唐船　弓八幡　鉢木　羽衣　道成寺　龍虎
芦刈　敦盛　木賊　葵上　輪藏

右御通知旁御披露申上候

明治四十三年五月十日

觀世流改訂本刊行會

觀清世之所以

明治
43. 5. 31
內交

文學博士　井上頼圀　本文監修

丸岡　桂　本文訂正

観世清之　節附訂正

五番目ヨリ末

畧脇能

春日龍神

二月シテワキ　龍神前宮守　明惠上人　中ヅイ

[illegible]日の行[illegible]もそなたぞと。月へる

國と尋ねん　これい柳の尾の小惠法

師[illegible]。われへ渡天は志あるよ

り。此暇ごのためよ春日の明神よまう

ぢやと思ひ。南都へ向ひは

たり。[illegible]宿。[illegible]ぞよそよ見てう。

月は数の国の杜。緑は宮も長閑なる都
なれども跡は見てこれも南は都路や。京
良坂越えて三笠山。春日の里は霞
きよけり。晴れたる空は白へば。和
光は光おなじ。それぞれ動ぎる
形を現して。世人をよる神道を表
し。里は平安の御代を見せて。人間長之
の誓満てり。まことよ所若も久堅の。
天は見屋根のせてうつ。月は立つ
影も鳥居の二柱。神社の松ぶも
さぞ面白けれ。神の代よりはうう
けて。澄める水屋の御影まで。麗よ
交ぢる神心。三笠は森の杜も。枝を
鳴らさぬ。氣色なり。

早川

いろと

れ為ん所なるやまべき事なれば
やと
れい梅の尾の小惠上人をして
作今はじめ来侍。さてそ御慮よ
おぼしめしはらん　さんぬ作今来侍
き守餘の儀よ非ぎ。やれ唐渡天
未あるまじ。暇もけ為よ作今来
ていこれい作をいべる。さまざまよ

人の当寺を計ら置事打こはば来侍
の時寺の内一尋速をだよ待ちね
御御慮ぞ。されば上人をば出
と名づけ。笠置解脱上人をば次第
と頼み双の眼両の手はめくして。書夜
名号の擁護ねんごろなるをそ家り
ていよ。日本寺を去り入唐渡天し給へん

ず。ゆゑに御願を満ずべき。唯おほ[illegible]
[illegible]まり法[illegible]げ[illegible]く行はるゝなれど
も。唐渡天の志も仏跡を拝まんなめ
りとて。行く御願を旨とすべき。[illegible]
仰ともおぼえぬもれうか。仏在世の時
おなじ[illegible]。見聞の益もあるべけれ。今
春日はこれ即ち霊鷲山なるべ

けれ。其人初来れる時。[illegible]
の手を合せて礼をなす。人問ひ申さる及
ばず。心おもき
三笠山春の草まれ。
くも仮らぬ枝を重ね。春日野辺
より続く。麓までも皆来りて問ひ。
膝を折り角を傾け。人を礼をなす。
の奇特を見ずしも真に浄土いづく

●サシクセ獨吟

ぞ。されば武蔵野の。はてまでも心や隔つまじく唯頼む。神のまゝに留りて神慮をあがめおはしませ。猶々當社の事有難し。和語り給へ。●然るに入唐渡天といふも。佛法流布の名をとらめ。古跡を尋ねんためぞかし。天台山を拝むべくは比叡山に登るべし。五臺山の望みあらば吉野筑波を拝むべし。昔は靈鷲山。今は衆生を度せんとて。大明神と示現し。此山に宮居し給へば。即ち鷲の御山とも。春日の御山を拝むべし。われを知れ。釋迦牟尼佛世に出づるぞ。さやけき月の世を照らしてぞ。神祇もあらたなる。れ社と拾ひある。慈悲萬行は神徳の迷

いと照りまさりたれば、小樽の累ばし、孟
なきを悲みて、涙を流す。瓔珞、細頸の衣を
脱ぎ、麻絮の散衣を着して、四諦の
法を授け、麻野苑もとまれり。
春日野より起き臥して、麻の苑をぞ
上シテ
其外、苗代のありさまの、いと三笠より陰さ
きや。そる日そなたへ、隠れて、極楽の方
より春日野へ。麓にまあるや星なき雨
はしきりに降みて、光ぞ増る七夕。法
の花も、童樹の枝にて春日野はもとそ
のどけかりけれ。はるあり、おなき事
うな。即ちこれとぞ神化と思ひ定めて、
度の人者ぞ思ひ出るべ。さてこそ分ハ
いなる人ぞ。花とおのり給へ。

唐渡天竺でまり法ぢで。三位殿は五天
竺の雪ー。摩耶の後生仏耶の威道統
宮殿法　上方　鎌倉殿まで悪く見
せ奉るべー。始めとる侍ち法へと。不綿四
手殿の苦われ時に表行ぞそそ
き消まやうよ。失せよけり。待宿中人神宿
ぢまあったるう。拝殿より光さ。

春日野の全色の世界とありて草
も木も仏法となるぞ。ぎなるく
時ぞ地震動まる。弥界の龍神は来
今ー。まべ。大龍王よ　阿弥陀龍王
波羅龍王　海仏界龍王　和修吉
龍王　徳叉加龍王　阿那婆達多龍王
耳春屠ぢ法蓮華経。平地ぞ波

上地
早苗
市上
刻迄レ

瀾を立てゝ仏の會座に出來して御法を
聴聞する其外妙法緊那羅王又
持法緊那羅王樂乾闥婆王樂
音乾闥婆王婆稚阿修羅王羅睺
阿修羅王恒沙の眷属引き連れ〳〵
これも同じく座列せり。龍女が立ち舞ふ
波瀾の袖白妙なれやわだの原排

ふ白雲立つ浪の空色も映る海原や。
沖行くばかりの。月の出汐。作保のいづるよ。
浮かみ出づれば八大龍王は
八つの冠を傾け。所は春日野の月に三笠
の雲より飛火の野守もいでて見よや。
摩耶の誕生。鷲峰の説法。双林の入滅。
悉く終りてこれまでなりや。明恵上人さ

[illegible]て入[illegible]とまらべ[illegible]沒天[illegible]る時沒
[illegible]まで[illegible]さて佛[illegible]尋ぬまでや尋
ねても[illegible]此[illegible]の雲よ[illegible]て龍女が南
方よ[illegible]び[illegible]り行けば[illegible]青[illegible]猿沢の池
の青浪跳[illegible]て跳[illegible]て[illegible]尋の大
蛇となって[illegible]ぬ[illegible]地よ帰りて池水
[illegible]て[illegible]せよけり。

五番目
畧二番

男女二人

三月ツレ里男後シテ七番
ワキ山伏

[illegible]弟[illegible]山[illegible]
[illegible]来[illegible]雲路[illegible]
なるらん[illegible]これ三熊野より出でたる
[illegible]僧[illegible]いまだ松[illegible]平泉[illegible]
[illegible]程よ此春思ひ立ち松島平泉へ
と急ぎ[illegible]幾[illegible]
く[illegible]彼の[illegible]契待つ[illegible]

だ夢の醒ざ井に宿と呂ぎ。臍次尾の音よのみ月の震もや美濃尾張。老と知れるの心かな〜　急ぎの

問ふれいもや上野の國佐野と申まで所よ着きて。沢所まで宿と借らぞやとな

じ。一声　法よ俗る道ぞと作る新橋。後の世助くる頼みうる　徒事激花〜

て行事も見殘まで夢に浮き橋よ。

牧數法へて多義ふ堀江の月の水際

よ寄る波ぞめぬあだ波の浮世よ帰

る方に道ぬれるねなる心うる　高

きもれと古への跡そうぐと思ひやる

上方

さきのせの報いのまくはれきて。

心よりけづとも見れば弘の海と海ぐ

き。船橋や岩越らぬ。二河の流れ有りお
ぐ。仲い十は道多まりまとは橋や流さ
ばや。いと宿。橋の勧めよ入り
て。中通りは。見申せば係は分と
して。橋興立の志ぞまぐもやさう
そは。これ仰せるも覚えぬものな
ぬ。必ぞ出家まあねぞ。志のあるま

じきまでもひそぎぞ。勧めよ入りて。通り
は。勧めよ。まりは。べ。さて。此橋は。
の。岸より。流されなる。橋そはぞ。萬
業集。歌。東路の。作野の。船橋。取放
し。ぞ。ぬ。歌の。心。知りめ。はそぞや
ワ女。いやさやりよ。申せぞ。恋。や。分の。去へも。浅
間。こぎ。沈へ。此河の。さへ。中

[illegible]
きづきなきだよ。若し水多き三軒
よ。浮うも便りは船橋と渚て賜ぞ
せ給へるよ　早川　げに親　親　なれだの
物語さて居りし船橋の主を助けん
其ためら　殊更　これいまだの橋をぞ
渚給へ　早川　そもいまだの分あれぞ
そて。取りなき橋を渚まべきら　きの

みな多ひ給ひそそよ。役の優婆塞
葛城や。初りし久米路の橋いるよ
女房　たるべき分よあるねぞ。われも女の
葛城の神　シテ　ひて言ぎふそてやもまで
女上　や。但幾度も岩橋の　ツレ　まど御心よお
けなきもぬさりあるよそて問くも葛
城や。役行ゐるある岩橋あるぞ。渚ん

なすも難かるべし　これは長き春の日の長閑けき水の船橋よさして柱もいるまじや徳よ持ちきんを作り給へ山伏・所は名にし佐野の渡り道なるよ袖うち拂ひて御通りあるら篠懸の衣も春あり河風の花吹き渡せ船橋の法は中きるの道作り給

へ山伏が峯を廻りても渡りを通らでいかで行き給ふべき・さてく万葉集に詠まれし東路の佐野の船橋取放しゝ又鳥の無つと二流に讀まれたる所と申したるはこれにて候ぞ　さん候それに付いて物語の候語つて聞かせ申し候へ　昔此所に住みける者忍び妻に

あとがれ所に行と聞てたれば此船橋を
通りてよおく通ひけるよ。二親此
事を深く厭ひ。橋に板を打放き。
それをば夢にも知ずして。ひつて板
を橋にすり。ひつぱりて落て宮く
ある。妄執とこれ因果とこれ。其まま三途
の流にぞ。蓮大仏蓮に水の間ぞ

られて　海をもせもおき者ども。海
をそあるめ河橋や船橋を押され者
を受くるぞ流にもてぞて。
流に分を責むる。少鬼とあり。喜りな
ば高ひばとと云。橋に鬼よと
ひて行く船橋も吉き。真に分て上
ありわが所弟ひて揚び落へ引合瀬

傾きて。霞の空も如きくゝ。雲さあり
雨となる。中有の道も近づくゝ。橋と見え
しも中絶えぬ。ていまきくゝ東路に佐
野の舟橋島無。錦とそ御書けり暮
宮も初しなる。ゆゝよりけりゝ
跡とあゝためてゝ。三賢が持の行ひ
よ五道の罪も消えぬべき。法の力ぞ。有

りがたきゝ。出端いろ行者ありがたな。後
よ三年迄よ流れ分れども。法の力ら舟
橋の。ぼうも分とあらあり。かたきよ
かよ行者われ猶。法を敷のゆるよ
り。ぼうみらねたら橋ぞの。重き苦患を見
せ中さん。法く涙雨とふゝ。ぬん濡りば。
水増りおず。降りくゝ。ぬよ 迷れや迷

しあだ波の　枝と頼く　縋石に　昔恵
地
られく　見捨へ法まし　や　見我身
青蓮華の　功力を受けていなく
くなる　底の水屑とあり　と知我
心青蓮　即身成仏ありがたや　痛さ
や　未だ邪悪業深き　其執心を振り
捨て　昔と懺悔し給へ　行ずも

懺悔の雲消えて　真如の月も出
でつべし　五障の霞の晴れぬるなり　春
の光の　時　蝶　夢の戯れ　よ　ぞ
深と見えし中さん　よ　や　吉野山の
らねども　妹背の　橋と
だえのありけるとい　自性の夜ごとよ
女上　海　流れ　落　の　昔よりなり　思

●仕舞
△立廻

（橋）

（ツレ二人）「素宵より雨降り初めたる。橋の流れ、
海も夜の月も寒さ更け静まりて
（上地）「人もねよかし丑三つ寒き。行末も厭
ちぐさ海の面の。月よ見えたる。人
影かそれか。心怪しや。橋もや立つ
そなたぞと見えて中の。橋と陽
て立ち寄る波のより羽の橋。鶴の行

（元入）きあひのまにまになりゆくまくらの。
橋問ひ。備みちぐさ。ものぞと。
（元入）「康時の伊野の。橋取り
親。
（元入）「嫁よ。
執心の鬼とおつて。
（元入）「橋。橋は立てられて。
よ。

の悪鬼とあつてやれと分と責め苦
患よ沈むと行者の法味力より真
如普光の玉橋の真如普光の玉橋
の浮るめる分とそなるよけるゝ。

髪物トイフ

源氏供養

三月ワキ　紫式部前世安居院法師　シテ　従僧

ワキ　夜も同じ苦しき道。石山寺よ
シテ　まうん。これは安居院の法印にて
ワキ　いわれ石山寺観世音を信じ参る者
シテ　なり。運びけるもなるぞやと思ひ
ワキ　時も名も花の都を立出でゝ。尼
シテ　よつとの波の白河おもてを過ぎ行けぞ。

高砂の龍とよそに見て、開けとおたなの
紙屋さんにも張る有明の月もあなた
よ海の海げよ面白き。乳色らかく
さて波や志賀辛崎の一つ松塩焼きね
ども浦の波たつとて水の煙なれく
のうく安居院の法印申まべき事
法印といとなたの事すていろ

行ぎのそいるぞ　女上　われ石ひよ龍り。
源氏幸帳と書きまるる。なのき源
まで、筆のまさえ若の形見いと
ありたいぐもの源氏よ絵よ供養をせぎ
り料よより。学らむ学ぶ。さむうへで。
強くいたりて。源氏の供養とのべ。
わぐ源でいたび法へと。法学申さん

一仁ゑ　ト　イ　早月　これ男も
そこ。これまでまゐりては　女　まづ石
よくぬるとて御ぐしもたれるる。さりぬべく
思ひ向けて供養ぜのべいべし。さて
作りて表して回向申すべき
よくまゐりつ。源氏の供養ぜのべ給へ。其
時われも現れてぞ。源氏を弔ひべし
早　女　カ　早
持ちたてまつる。奇特なり。いで源氏を

書きし　女　恥ずかしや。汝が名を流せし土と
早　早　女中
なれども　名をば埋まぬ苔の下　石
上　早　女上　女上　ル
山者よりつ雲の　源式部すてまう
ま　女入　恥ずかしや。色よりいづる源氏
ロウ　ナイ　コト　元　イウ
くも雲もそなたの名歌さてそれ
ト　イ　イ　イ　元
つるなのうえまでもまき消さてやまうよ。其
ト　イ　早カル　ト　ト　ト　ト　ト　ト　ト
よりりく　中木　さて石のよくまゐりつ。名弱

を勤め事終り、後も更け方に、鐘の
聲心も澄めるころなり。あり つる源
氏の御伴、車もぬるもあれども、供
養ところべて、法式部の、菩提を深
く、とよべきあり、とぞ思へども、
だ世なり。夢ばかり、法花を
る花も一時の物だなれ。古へ、先

源氏の物語。聞くにつけても、其頃頼
みあるさまにて、うちとけ、又、
形見とあるにも、思ひ出でられ
花も法花をよ出で
恥ぢ、かくて、世も深更るまで、
聲ときまり、心澄きまるに、燈
消えと見れば、ものうくしき女性法の

薄霧にそぼとそう。影のめぐるよ見えそ
ふ。夢か覺かおぼつかな　女　うつろひ易き
花もかな。龍女の姿下ろされ。法花の
そ見えぬ枯野の草。本もまた末
通ひぬ。花の盛りぞ知らぬ。ぞや
早上　法花の法よ出でぬとあるまじ。嘆の
末とは心得ぬ法式。新しきまま

女上　恥ぢ知らぬ。わが深　早　其面影の
女　深よ今も変らぬぞ　早　心や　女　あき
上　もせぞ　寝もせぞ。恋ひ慕ひ。月
も心せよ。恋ひ慕ひ。鐘の響。夢とも侵
ふ。の前消えいそしら燈ぜれ。光源氏
の。消えそうん　女二　あ。あ。ひ。の。
や。行ひ。布施よ。あ。せ。べき　早　いや布

施かぞへ思ひもよらぬぞかしとも泣せい
夢のうちの昔よりまた涙は袖に入る袂
うて見せ給へ　女　恥ずかしさうそてい。
仰せやでいうぞ皆くべきぞいでくさうぞ
涙ちんそて　早カル　もてまう其名も濃の
女
色ぬらうき袂は　早　月もくれなる
の扇を持ち　女　恥ずかしの　早　あ

サシクセ　獨吟

さて胡蝶は　女　ひらひらと　上月　夢のうちの
ある昔の袖の　見よ返さまよもぐる
花の衣は　女　色濃　地　濃の匂ひ袖ふる
クリ　女　そなたを昔とのうの月は前のいづも形も
ある　世夢のわが　作あつて百年を送
る　横笛　月作同じ　こそよ數なる濃
式部　頼みをあつて石ぞ　悲歌を頼

み簾巻き居て、ひわ琵琶を笛よ合はせ、さ
ざめき合ひたる、いとをかしう、月はよう
澄みて、雲もなく晴れわたり、女郎花
の、露も、ことさらに作りたるやうに、
匂ひて、心地ゆき、弱ぬ。つれ〴〵
なる。宮、堂の眺めを、見給ひて、南無や、光源
氏の、霊成等、覚えず、桐壺
の煙遠くよ法性寺、宮よりの帝

●仕舞

ぬ。宮、中将、宮、さ法性寺と厭ひて、やう〳〵頼
は、露の命を、歎く。若法、雲の、中へ、末摘
花の、草よ、法性寺の、賢し、秋の、帝
様もよ、やうく、神、言よ、なるこ
ろ。神、様は、さて、法性寺、弱よ、べ
花、散る、里よ、住むとても、賞、新、苦の

上女

理免うれづたき道とうれ。はまべうく
は死流浪の須磨の浦ゝ出でゝ。四
辺国所々の海ゝ澪標いくまぞ
もありける。はるばる生れ宿るべき。菩提
の道を尋ぬべし。花の咲くそも。葉
障の高雲に晴る事更なし。なの風
消えぞゝて。法の磨り摩れ藤袴。

昆陽。菩提心を懸けて。誠ある。大願
花厳の。真木柱のもとゝ行く。梅ゞ枝
の匂ひ移ら。ば心。藤の裏葉。置
く露の。其日長。憂かりけり。朝顔。
頼まれぬ。朝ゝ。梅枝の。張ゝ。寄木
花もうき。宿。竹。東屋の内ゝ。龍め
て。楽ゝみ。栄えと。浮舟。蜻蛉。

やうに晴れ渡るべし。夢は浮橋
とうち渡りて東をこそ眺めべし。南無
や西方弥陀如来。往生侍らばとうち捨
て法式部が後の世を助け給へとも
ろともに。ほうらうして回向も既に
終りぬ。げに面白や舞べの。袂今
はと帰る鳥の。夢ともなまし続うな

女上

光源氏の中将と。弔ひ法華かなて。わ
れもまろん華の花の宴に頼もしや
げに名残い社の光 多べよ月の影もお
日上人
一 紅葉は露庵に影のづれあ
てるぬ。なめあれ浮世や よく
わと栄ぎるる。法式部とやまい
彼の石に観せ者。假に浅せよ現れ

てかゝる源氏の物語。これも思へば夢
の世と。人に知らせん御方便げにあり
がたき誓ひかな。思へば夢の浮橋も。
夢の間の言葉なり〳〵

四番目
暑三番

花筐（ハナガタミ）

九月

シテ　照日前
ツレ　侍女（うたひし）
子方　天皇
ワキ　官人
ワキツレ　供奉（男）御使

男詞「これは越前の国味真野と申す所に
御座候。男大迹の皇子に仕へ申す者
にて候。さても都より御使ありて。武烈
天皇は御位を味真野の皇子に御
譲りありて。御迎ひの人々まゐり下り御
供申し。今朝早く都に御上洛にて候。さる

同社程に寵愛あつて昼つゝきれて
いる。照月前と申す女方。社程に暇をそ
御暇よびぞ。かれ御方へ伺ひ上
ぶよつまに玉章と毎夜御文を別
れ花筏と書せられいる。某を
持て来れるの事をそ程に。唯
今照月に星へと急ぎぞ。あゝ嬉

やこれへ出でいよこれをそ申ぶべし。
いや申さう　仕ずるそなたで　男　我ら居
い者より出迎ひ下り御位を即ち在
所。今新ゝ出ずるそ。これ有る出
文と御花筏をと。確と渡せよとの
申すそなたこれ〳〵ぶ　女　さそい
我ら居御位を即ち在所。新への出

り返まづ〳〵もちめでたりとそいへりよ
さりあづ。此年月はれは若殘しつけせ
ようい在るべき。あるまじ若殘惜しや。さ
しづもおぼ〳〵忘れぞして。ぢまを
と殘置せ給ふるはありがたきよ。
急ぎ見まゐせいちん。われ應神
天皇は孫苗と徳ぎあづ。帝位と

履む身よあるぎれいづも。天照大神の
神孫なれば。毎日伊勢と拝し奉
り。其神威のあらはる。群臣の擯
みよ出だされて。いざあちれ雲の上。
思ひあるべき月日と。我の頼みよ殘
まあり。頼めたる袖なれ。別れし日の
の。暫し雲井よへだてありもと

書き置きし水茎の跡に残るぞかし
ありき君と住む程なりしに
ほまし。檜残りて有明のつれなき
春も杉間の松の風もうらめしや
跡とぞなりにき花筐玉章と。
抱きて里に帰りけり　君
の恵みも高照らす　紅葉の御

幸ひめん　忝くも此君は。應神天
皇五世の御末。男大迹の皇子と申
しが。當今武烈の御位をさまりて。継
體天皇と申すなり　されば治まる
御代のしるし影日本の名もあらはれ
ふ　大和の国や玉穂の都に
宮造りあらたなり　萬代の恵

「みもろ」の富士の草はら。種も栄行く秋の宮。露も時雨も時めきて。四方よき清き初紅葉。松もみどりの緑にて。常盤の秋は四つ。常盤の庫裏浮めんく。いろあれまる旅人。都への道教へて賜べ。何わびしとも。わびしも思ひ入れあれぞそとよ。

ゑど清水。教へ給ぬぞや。上臈女　よしのの人い教へぞ。都への道教へ。そこいらへ。あれ。ぜひ。庭は。清水の。何庭の清水。げに今思ひ出だしたり。秋はいつも庭の。南へ流る。天つ宮。そこ。そこ。あらじ。居ぐ位。都とやらんも。そなたあれぞ。何や。きつべの便れ

ツレ　友と　われも田の面の雁こそ連れて越路のしるべなれ

シテ　其上蘇武が旅雁　玉章をつけし南の都路に　われともろともに遅れて行けば　宿かりがねの旅衣

地　飛び立つばかり心なる　君が住む越の白山知らねども行きて見まほしけれ

二人　大和はいづく白雲の高間の山のよそにのみ見てややみなん及びなき雲居はいづく御影の日の本なれや大和なる玉穂の都に急ぐなり　これ近江の湖なれやみづから　よるべも定めぬ身は浮き舟

小謡

上哥　こがれ行く旅と忍ぶの摺衣涙

も色白黒髪のあらざりし別路にあ
とよ心の浮うれきて。庵の起居堪へ
うねて。ふる雨にぬれ草は野暮れ
れし。露ふけて。玉虫の音よ寒
きよけり。時しも頃は長月やま
だき時雨の色深き。紅葉の古寺の
道はれ。ひ。非形に戒め面。ち幸れ

ぬ。さきと清めけり。きなきだな
都よ。ぬれぬ鄙人の。ぬ。ひ物人と
ひ。さそ心。情の葉は。も乱る
露霜の。幸れ。出そ庭みけり
ぎやふ。甚さま人よ高りなる。物
ぬと見えて見甚やそ。宮人立ち
より。挿ひけりそ。ぬきひへ

悲しや君は古花笠とうち落されていいいるゝ　シテ　何と君の古花笠とうち落されたるとや。あらいまはしれ　ワキ　いかに狂女。持ちたる花籠を君の古花笠とて渇仰まらいそも君とは思ひ寄もよ　シテ　事新しき問ひかな。此君なくして同れ申よ。また

異君はまゝまゝ　ワキ　われらいかに　シテ　狂べなれば。初めと思ひ給へ。天皇五世の御孫。昌邊過ぎ。須磨の。保真野と申まゝ　ワキ　男大迹　シテ　皇ぞと申しゝ　ワキ　今は此国主徳の教　シテ　継体の君と申まゝ　ワキ　されば

だかほどうめでたき君の御花笠
と忘れもおきで　うち高く指よ人で
こそ・「われかりも狩もおぼえよ　忘
れ」。せいませよなどのべど。月日
地よ高ちぞ。まだ散りもせぬ花笠
と。あ〜けるやあ〜あねれ　さよ高く指
ちぐ。天のうぐめも忍ちよ。詩あたり指

上元不仍氣て。友の物狩
といちさせ指よ人よいちれさせ
指よ申せぐ。たぐ
現あき花笠。言とやあぼまう
ん。此居まだ其頃。皇ぐれ出なな
れど。弱毎の動めよ花と手向け
引揮。南無や天照皇大神宮。天

長地之と。極へさせ給ひつ。所手と
合させ給へ。古面影の身よ淋し
て。忘れ形見までもあつらや哀
しや陸奥の淺香山の花ぐつみ。
日、うつ見つへと哀草の。思ひもぐぎり
ぬ。ひ色ぞ。恋心君ゆえなり。とこよ来
てだよ濃てある月の新い君のみ

て。神よもうさんぜ。又手よも取り
れぞ。但俺よ水月と恋む様のい
くよて。ひ伏て泣き居たり
く。いよ程。宣旨よてあるぞ。
所車迎うと乗りて。いよも面白う
牡うて。舞ひ遊びひ。歓楽あるべ
きよの所存よてあるぞ。急ぐで牡

●獨吟サシクセ

ひいらへ、持てやさてはなびあるき。古影
を持てやもべき。いざや狩もんもろ
ともよ。御幸よ狩の難とて。帝
先を搖り。袖なれ。●天のきたなへ
なれども。いろなれば。袖まいまへの
古影れと。敬き法に。新政神さびて。
花のれとども。使ふ。但男の涙濡衣

●仕舞

の。袖をぬるまで。又まへ。紅色
は。花の粧に。衰へて。露は床
のよもすがら。鏡の影を恥ぢて。袖よ
帝よ。見て法をぞ。中ぞ。
クセ●帝。歌うせ法に。●歌を
甘泉殿の。障子。写。われも。畫図よ
立ち添ひて。●影。敬き法に。

しるもあるべし。中男女い増されども。おのいひ交わせ守なきゆゑ。常に歎き給へば。妻ありと申せ共。たいしとけあるまゝ。父常に妻に語らふやう

上ニテ

妻まゝ人へ申おいとしの。上界の嫉妬。わすいこくの仏なり。只人間よりて。こと申せども。後よ者れ仏宮よ向

りぬ。泰山府君よ申さく。妻まゝ人へ面影ゆ。軽くとゝよ振べ。ゝ。九華帳の中よりて。反魂香をたきゆゑ。更け人静まり。心ゆ

く。月秋あるよそれゝと男よ面影のあるゝなきよりよりげろへど。れいやまの男ぶ。義ふまよ清ふ白

露に手をもたまらで宿もなく作
徳は消えぬしれぞ栗鼠飛揚り
ていと尋ぬべき方なく
のあまりよ。まゝ人べの位なれし。甘
鼠敷を立ち去らぬ。室一き庭を
うち拂ひ古き食。古き枕ひとり袂
やおたゝ。宣旨なるぞ。其

花筐を手にせよげひ。餞りに
なりは胸ふさぎ。心室なる花筐を。
恥ぢ。なぐ手ぐ手。寄られ
て。嬉しもなき田舎よ
て。手よ別れ。花筐。同じ
面の置き活ひ。玉章の保
と忘れ。牧氣を面めよ。呂

し使ちんろの宣旨あり。げよあり
がたや御恵み。直なる古代より帝
るも。思へば係り。笹の德。帝
られるもよはよあり。花の笹代名
とめて。帝。き人の手馴れ
わを。形見と名づけそめ。事
汲はよりぞ。姫まりけり。ありがた

やはりぞ。あり。清のまを白露の。恵み
よ。れぬ花笹の。御ろどとまま
さぬ君の心ぞ。ありがたき。御
越も。洗よ。はよ。ぎて。ぶ。八。
事。あり。事らんと。仕事。人。御
車。やりつげ。もみぢ。紅葉。散り。ぶ
御。出。と。掃。掃。や。袂。もと。ぶ。

後世にいやしき猿の都。後世にいやしき猿の都。

ぞ。ありがたき

四番目
畧三番

富士太夫

九月

シテ 富士ノ妻
ワキ 同人ノ子
狂言 官人
従者

これは荻原の院より仕へ奉る者にて候。

さても内裏より七日間管絃の古歌を

ゆ。天王寺より淀川と申す楽人。

これは双びなき太夫にて候。

やうにとせられ。太夫の役を仕りし處

よ。位を去り富士と申す楽人。これも

ゆらぬ大地のごとくなれども震撼せず
役を終えまかりそうろうて、浅間同じ
日さんに富士浅間行けども面白き名所
りさりあるべく古き歌よ情濃なる浅
間の嶽も焼けるとのべて富士は煙のか
ぶやあるんと同時ぞとそ上なき
富士なりとも。あつぱれ浅間なまきり

ぎりもいとも勅使あるべしよりも重
ねて富士の中まで者もあるべさる程
よ浅間沈由と聞き。悔き富士の振舞
うなるそかれ宿寄より押し寄せあく
あく富士と対つて。真よ不便の次第
まそ。ぞめて富士のゆりけあるきす
いるまど。若し尋ね来りてはそで。形見

と雲にさぞやとなげいる。雲の上なる
はるかなる富士のやくへと尋ねん
女カル
これ津の国住吉の里人富士と申せ
人の妻やなりそいさそも四裏よ七月の
満潮のまゝまそよう。天を者より
里人よきれまち面と聞きやつ。つぐ夢も
古枝の役せる憑れおけれど。望み申

さん其なめよ。都へ上りし枕の
夢。心よりの雨　月と知る袖
の濡るゝ何ならねなる枕もそぐ
寝られぬまゝ思ひ立つ。雲晨
やそなた古里。恋とあれや住吉松
の蔭より眺めれば。高もある山城
もとやめづけで笠とぬぎ。八幡よ祈

り掛軸に清少契の夢あるぞ。慎よ
遊よ男子は都に早く着きよけり
〳〵　女子　急ぎは程よ。都に着きては。
此所にて富士に行くべを尋ねぞやと存
じ。いる業門申し　女　昼に富士ゆかり
の者ぞ。ぞよ。ぞ合せられて張
りゐへ　平子　富士ゆかりと申さに行くよ

あるぞ　女　これは　平子　さてこれは富士ゆ
なれ行くあるぞ　女　恥ずかしき事や
さてはのう　平子　富士に対たれてゐよ
行と富士に対たれたるとぞや　平子　あるくの
や。富士に対面は対たれてゐ　女上　されぞこ
そ男に会せて夢に。宝ねてとぞ
あるくよ。対面は対たれ清なく　さて

り掛軸に清少納言の夢の歌で。覺よ
遊ぶや男の都より早く着きよけり
（女）急ぎの船よ。都より着きては。
此所より富士に行くべを尋ねぞやと存
じる。いる業門申し（女）昼に富士ゆかり
の者ぞ。ぶらき合せられて張
り込べ（男）富士ゆかりと申さ行くよ

あるぞ（女）これは（男）さてこれに富士ゆ
なら行くあるぞ（女）恥ずかしい事や
さては（男）のう富士に行たれてはよ
行と富士に行たらとゆ（男）あるくの
や。富士に淺間は行たれては（女上）さればこと
そ男に合せて夢はば。宝ねてとちゃで
あるくよ。淺間は行たれ清なく　さて

も若き富士おど。重といふ人ぬらん。
今い歌くよ甚らひもなき海ゆ表る思ひ
ぞと見るもらよいそで牡鹿も涙はせきあ
へぬ　今い歌きてもうひもなきするそ
あるぞ。これそ富士ご様の將束ばるよ。
それの歌きよ。飛見よ思ぎたる事
あるど。これと見て心と駄めるへ今ま

で行くへも知らぬ都べのわらもわと思今春
は有とおぼめて。偽りぞよと思ひよ。
真よ去るき馬申。月日も変らぬ將衣
の袖ふ涙もあるぞこそ。痛ちやもの人
出で泣く時。べづらに申まやりえる者
は樂人ゆ見るそたり。学い勅使な
きよ。あてまれでてるて。上と訪る

よ似たらべ。長上手が身に富士地獄楽
へまて。何ぞ仕申まじ行の淫乱の
あるべきぞと申まつた。ぬ顔して出
で行そ。　長面影に身を法へど真の
もいてま所の底に形見ぞよ。あきか
ねてより。あるべきと思ひおもあ
るべきと思ひぞ。猿ぐ手ぬ出げ。

猿ぐ濡そも止むべきもと今更の神
ぬ身と恨みもとち影ぞ哀る影
ぞ哀るけ。　あ恨めいよ姫。あ
れよの敵いぞいざうたり　あい
古枝そこそいへ。思ひの餌ぐ忘れ。
儀なきすと作せぞ。あさまや
ば　たそ人の気言。あぞ別れわ

ぐまの夫せ〜ずも太被なたぐ保めき
いた被ぬ。まの敵よいざすたら　姫　げよ
理ぬ。長門前よ。別れ〜ずも太被力名。
さあ〜ぞ親の敵ぞう。おちて保めを晴ら
きべ〜　女　わ〜ぞうためよいまの敵いざやね
らちんもろもよ　姫　男に深将衣よ。ぬの
異ぬれや鳥甲　女　保めの敵討ちをさめ

●仕舞

姫　被を苔よ　女　埋まんうて　地上　寄まるや国の
勢立て。秋の月より冷まや　女　うてやく
と攻被　地　あ〜さてうれ。あ音やあ
上音　地上　れも思へぞ脇たちや。けいたる深よ。き
へて。心言深も及ぞれぬ言ぞ幽霊まると
見えてよ。まの保めやもぞ。と太被うち
静　女　たちや　楽　持ちたら掻ぞ剣と定め。真

表の煙は太鼓の煙火の。天よりおりれば雲の上
へ。真ん中高き所に絶えずもまれて紙野
の櫓。四方へぱつと散るかと見えて。花ぞさ
き手もろ〳〵手も。仕ぶりの華やかに。太鼓の
仕ぶり。面白の下宮。もつぐ
ひるやあつらやうばよやかの悪心。
煩悩の雲晴れて五常楽を打ち給へ

女上

阿鼻の太鼓打ちやみぬ。仏菩の所命。
地上

よ伏楽と打たるよ。さてさて代や萬
代と。民も栄えて安穏よ。太平楽を打
たるよ。日も照よ傾きぬ。端を
明めやりて招き返さん。詳しの様。今
そそ。国に敵はなしたれ。打たれて音とや
出でまらんわれはい晴る。陶の煙高士ぐ収

へと晴せし涙こそ上なりけれ　これま
でなりや人々よ暇申してさらばと
伶人の姿鳥甲脱ぎ捨ててわが心乱れ
笠乱れ髪かかる思ひを忘れじと又立ち
返り之を被こそ憂き人の形見なりけれ
と見置きてぞ帰りける所見置きて
ぞ帰りける。

明治四十三年五月二十日印刷
明治四十三年五月廿五日發行

著作權所有不許複製

訂正者ノ撿印ナキモノハ僞版也

訂正兼發行者　東京市麴町區中六番町二十九番地　丸岡桂

印刷者　東京市下谷區二長町壹番地　塚原錦三郎

印刷所　東京市下谷區二長町壹番地　凸版印刷株式會社

發行所　東京市麴町區中六番町廿九番地　觀世流改訂本刊行會
電話番町二五四四番

246
13
198